



水沢の伝道師

## 片桐清治

片桐清治は、明治の初期、水沢教会（水沢基督教講義所）の初代伝道師（キリスト教の教えを伝え広める人）として、宣教活動に献身した。

片桐は、一八五六年（安政三年）一月、留守家臣の片桐英之助の子として、水沢の吉小路に生まれた。山崎為徳、後藤新平よりも一年の年長にあたる。幼い頃は、武下節山について漢学を学び、菅原竹侶に絵を学んでいる。

胆沢県が水沢に設けられた時、当時の県令（今で言う県知事）は、地方の有望な少年四名を選んで給仕（細かい雑用をする少年のこと）として、身近近くにおいて、教養を授けていた。その少年の一人に、片桐も含まれており、山崎為徳、後藤新平、斎藤實と共に働きながら学び、互いに切磋琢磨し合っていた。

水沢の地にキリスト教を初めて伝えたのは後藤寿庵であるとされているが、その後、徳川幕府の禁教政策（キリスト教などの宗教を

信仰することを禁止する政策）や、キリシタン（キリスト教を信仰する人々）への迫害により、仕方なく、改宗（信仰する宗教を変え）ること）する信徒も多く出た。明治に入り、ようやく政府がキリシタン禁制を撤廃し、水沢でも、一八七四年（明治七年）になり、禁制が解かれた。一八七八年（明治十一年）には、水沢においても、宣教の動きが見られはじめた。

同年四月、キリスト教の中心は、プロテスタント（キリスト教は、その教えの違いから、大まかにプロテスタントとカトリックに分類される）にあると信じた青年の有志たちが、京都の同志社英学校（現同志社大学）に在学中であった山崎為徳に宛てて、水沢へ伝道師を送ってくれるよう依頼する文書を送っている。その青年たちの中に、片桐もいた。

一八七九年（明治十二年）の夏、同志社英学校を卒業し、同校の教員兼幹事となった山崎為徳は、一時水沢に帰省し伝道を行った。片桐も山崎為徳を迎えてその説教を聞いた。しかし、この活動が定着することはなく、水沢での伝道も消えてしまいそうな状況になっていた。

翌年、水沢の有志達と山崎為徳が何度も協議を重ねた結果、伝道者としての教えを学び修めるために、片桐が同志社英学校に入学す

ることになった。片桐は、二十五歳で、妊娠中の妻など、一家を支える身でした。また、金ヶ崎小学校校長の職にもついてた。それでも、妻を両親に託し、辞職してまでも、同志社英学校へ入学することを決心したのでした。

片桐は、五年間、同志社で学び、一八八五年（明治十八年）六月、同志社邦語神学科を卒業すると、すぐに故郷である水沢に迎え入れられ、専任伝道師に任命される。吉小路にある留守家の家臣である内田邸の一部を借り、仮の講義所として、連夜、祈禱会などを開き、講演や説教を行った。片桐は、様々などころへ行き、忙しくかけめぐり、伝道に努めた。これにより、水沢教会の基礎が築かれたと言われている。

一八八七年（明治二十年）六月に、仙台に新島襄（同志社英学校校長）を校長とする東華学校が創設されました。この翌年の四月になると、片桐は東華学校の幹事兼教員として招かれ、水沢を離れることとなった。

この東華学校は、一八九二年（明治二十五年）に廃校となり、片桐は福島教会の主任者となり、そこに移ったが、一八九七年（明治三十年）に、再び仙台に戻り、仙台教会の牧師（教会の責任者）になっている。その後、東北部会長という重要な役職につくなどして、

三十年以上もの長い間、伝道に努めた。そして、一九二八年（昭和三年）、七十三歳の時、仙台で永眠した。

長い間、人情にあつく、誠実に伝道にあたった片桐のその人柄は、多くの人々から人望と信頼を得ることとなった。片桐の生涯は、水沢にとどまらず、東北地方でのキリスト教の伝道の拠点築き上げた。さらに、新島襄らが東北での宣教にかけた情熱と片桐への期待に応える生涯でもあったとも言える。

現在は、奥州市水沢区山崎公園の一角に、片桐のブロンズのレリーフがあり、すぐ隣には、山崎為徳の胸像も置かれている。



水沢区山崎公園のレリーフ

#### \*参考文献

『一歴史と観光―みずさわ浪漫』 水沢市・（社）水沢観光協会  
『奥州おもしろ学―ジュニア・テキスト』

特定非営利活動法人奥州おもしろ学